

鹿児島市方言の共通語化について

崎村, 弘文
鹿児島大学教育学部助教授

鮫島, 雅美
西之表市立榕城小学校教諭

<https://doi.org/10.15017/10366>

出版情報 : 文献探究. 34, pp.17-33, 1996-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



鹿児島市方言の共通語化について

崎村弘文

鮫島雅美

0. はじめに

0-1 鹿児島市方言の共通語化については、既に木部暢子1995等において論じられているところであるが、筆者達もまたやや違った角度からそれについて調査を試みたことが有る。本稿では、その結果について明らかにし、木部の云うく「からいも普通語」の実態をより明確にしてみたいと思うのである。調査に当っては、別表に示す如く多くの方々に話者として御協力頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

1. 語彙の共通語化

1-1 ひとくちに共通語化といっても、それは語彙・語法・音韻の各部面に亘ってさまざまな様相を示しつつ展開しているであろうことは云うまでもない。そこで、以下では、それぞれの部面に分けて解説を加えて行くこととしたい。

1-2 まず、語彙について述べようと思うが、これもまたどのような範囲でそれを把握するかによって現れて来る結果が大いに違うであろうことは想像に難くない。そこで、ここでは、崎村が方言調査の際に用いている基礎語彙表によってその大方を示し、その中で特に老年層の方言に見られる特徴的語彙の若年層における残存率を見てみることにする。

基礎語彙表による調査結果

共通語	鹿児島方言		
	10代(女)	30代(男)	70代(男)
頭	あたま	びんた	びんた
顔	かお	かお	つら
首	くび	くび	くっ
ひたい	おでこ	ひたい	ふて
あご	あご	あご	あご
眼	め	め	め
鼻	はな	はな	はな
口	くち	くち	くっ

(18)

耳	みみ	みみ	みん
髪	かみ	びんたんげ	びんたんげ
眉	まゆげ	まゆ	まゆ
ひげ	ひげ	ひげ	ひげ
歯	は	は	は
舌	した	した	した
のど	のど	のど	のど
肩	かた	かた	かた
胸	むね	むね	むね
腹	はら	はら	はら
乳	ちち	ちち	ちち
へそ	へそ	へそ	へそ
背	せなか	せなか	せなか
腰	こし	こし	こっし
尻	しり	しり	しったびら
腕	うで	うで	うで
肘	ひじ	ひじ	ひじ
手	て	て	て
手のひら	てのひら	てのひら	てのひら
脚	あし	あし	あっし
腿	もも	もも	もも
膝	ひざ	ひざ	ひざ
かかと	かかと	かかと	あとじい
指	ゆび	ゆび	ゆっ
親指	おやゆび	おやゆび	おやゆっ
人差指	ひとさしゆび	ひとさしゆび	ひとさしゆっ
中指	なかゆび	なかゆび	なかゆっ
薬指	くすりゆび	くすりゆび	くすいゆっ
子指	こゆび	こゆび	こゆっ
爪	つめ	つめ	つめ

親	おや	おや	おや
子	こ	こどん	こどん
孫	まご	まご	まご
祖父	おじいちゃん	じさん	じさん
祖母	おばあちゃん	ばさん	ばさん
父	おとうさん	とうちゃん	ちゃん
母	おかあさん	かあちゃん	おっかん
兄	おにいちゃん	あんちゃん	あいやん
姉	おねえちゃん	ねえちゃん	あねさん
弟	おとうと	おとうと	おとっ
妹	いもうと	いもうと	いもっ
おじ	おじさん	おじさん	おじ
おば	おばさん	おばさん	おば
甥	おい	おい	うえ
姪	めい	めい	めい
いとこ	いとこ	いとこ	いとこ
夫	おっと	おっと	とのじょ
妻	つま	うっかた	うっかた
婿	むこ	むこどん	むこどん
嫁	よめ	よめじょ	よめじょ
息子	むすこ	むすこ	むひこ
娘	むすめ	むすめ	むいめ

特色有る語彙(音調についてまでは問わず。以下同じ)

①びんた(頭) ②ごて(手足) ③あとじい(かかと) ④とのじょ(夫) ⑤うっかた(妻) ⑥すんくじら(部屋などの隅) ⑦やまいもをほる(酔ってくだをまく)△
以上の①～⑦について、a使用している/b使用しないが聞いたことは有る/c聞いたことも無い、のいずれに該当するかを選択してもらった。それを百分率にして示したのが次の表である。

		男	性	女	性

(20)

		10代	20代	30代	10代	20代	30代
①	a	3 6	8 0	8 4	1 2	2 0	2 0
	b	6 4	2 0	1 6	8 8	8 0	8 0
	c	0	0	0	0	0	0
②	a	8	3 2	6 4	1 6	4	8
	b	2 8	5 6	2 8	1 2	5 2	7 6
	c	6 4	1 2	8	7 2	4 4	1 6
③	a	0	0	0	0	0	0
	b	1 2	2 8	6 0	1 2	2 0	2 8
	c	8 8	7 2	4 0	8 8	8 0	7 2
④	a	4	8	2 4	0	0	8
	b	1 6	4 0	6 8	1 6	5 6	8 4
	c	8 0	5 2	8	8 4	4 4	8
⑤	a	8	3 2	7 2	0	8	8
	b	3 2	6 8	2 8	4 0	9 2	9 2
	c	6 0	0	0	6 0	0	0
⑥	a	8	4 8	5 6	0	3 6	1 6
	b	1 6	4 8	4 0	4 8	6 4	8 4
	c	7 6	4	4	5 2	0	0
⑦	a	2 0	4 8	7 2	4	3 6	4 4
	b	4 0	4 4	2 4	3 6	6 4	5 2
	c	4 0	8	4	6 0	0	4

これを見ると、いずれの語も年代が下がるにつれて使用率・理解率が低くなり、それだけ共通語化が進んでいることが分かる。特に、③の「あとじい」については各年代において使用率が0%であり、急速に共通語化が進んでいることが分かる。⑦の「やまいもをほる」については10代においても使用・認識率が他の語に比べて若干高くなっているが、これは面白い表現であるため、一度聞いたらずれず知識として残るためかと思われる。男性と女性との比較では、男性の方が方言使用率が高く共通語化の度合いが低いといって良さそうである。このことは、従来云われていたところ——女性の方が男性より方言から共通語への使用言語の移行が速い——に異なる結果となっている。

2. 語法の共通語化

2-1 語法の共通語化についても、まず基礎調査表による調査結果を示し、その中で特に老年層の方言に見られる特徴的語法の若年層における残存率を見てみることにする。

動詞

1. 行く

共通語	行く	私はきのー役場へ行った
鹿児島方言10代(女)	い ^ー く	わたしは きのー やくばへ いった
〃 30代(男)	い ^く	おいは きのー やくばへ いった
〃 70代(男)	い ^っ	あたや きぬ やっべ いった

町へ行って買物をした	町へ行く時はバスに乗る
まちへ いった かいものを した	まちへ いくときは ばすに のる
まちへ いった かいもんを した	まちへ いくときゃ ばすに のる
まち いった けむんぬ した	まち いったきゃ ばし のっ

あんたは町へ行くか	行くよ	行くぞ	行きます	行きたい
あんたは まちへ いくの	いくよ	いくぞ	いきます	いきたい
あんたは まちに いくとけ	いくよ	いくぞ	いきます	いきたい
おはん まち いっか	いっよ	いっど	いっもさ	いごぢゃっ

行くだろー	行ける	あの人は役場へ行くのか	行くらしー
いくだろー	いける	あの ひと は やくばへ いくのけ	いくらしー
いくだろー	いける	あん ひと は やくばへ いくとけ	いくらしー
いっどだい	いっがなっ	あん やちゃ やっべ いっとか	いっどだい

行きそーだ	行くそーだ	行かせる	行かれる(受身)	行かない
いきそーだ	いくそーだ	いかせる	いかれる	いかない
いきそーだ	いくそーだ	いかせる	いかれる	いかない
いっそなふやっど	いっちゅが	いかすっ	NR	いかん

行け	お行きになる
いけ	おゆきに なる
いけ	おゆきに なる
いけ	いっきゃっ

(22)

2. 書く

書く	私はきのー手紙を書いた	手紙を書いて出しに行った
かく	わたしはきのーてがみをかいた	てがみをかいてだしにいった
かく	おいはきのーてがみをけた	てがみをかいてだしにいった
かつ	あたやきぬてがんぬけた	てがんぬけてだしけいた (ママ)

手紙を書く時はペンで書く	あんたは手紙を書くか	書くよ
てがみをかくときはペンでかく	あんたはてがみをかくの	かくよ
てがみをかくときゃペンでかく	あんたはてがみをかくけ	かくよ
てがんぬかっときゃペンでかつ	おはんなてがんぬかっか	かっよ

書くぞ	書きます	書きたい	書くだろー	書ける
かくぞ	かきます	かきたい	かくだろー	かける
かくぞ	かきます	かきたい	かくだろー	かける
かっど	かっもんど	かごごちゃっ	かっどだい	かっがなっ

あの人は手紙を書くのか	書くらしー	書きそーだ
あのひとはてがみをかくのけ	かくらしー	かきそーだ
あんひとはてがみをかくけ	かくらしー	かきそーだ
あんやちゃてがんぬかっとか	かっごちゃっど	かっそなふやっど

書くそーだ	書かせる	書かれる(受身)	書かない	書け	お書きになる
かくそーだ	かかせる	かかれる	かかない	かけ	おかきに なる
かくそーだ	かかせる	かかれる	かかない	かけ	おかきに なる
かっちゅど	かかすっ	かかるっ	かかん	かけ	かっきゃっど

形容詞

3. 赤い

うさぎの目は赤い	赤かった	赤くて丸かった	赤いか
うさぎのめはあかい	あかかった	あかくてまるかった	あかいけ
うさぎのめはあけね	あかかった	あかかせーまるかった	あかかけ
うさんのめはあけ	あかかった	あこしてまんまるかった	あけか

赤いぞ	赤いです	赤かろー	赤いらしー	赤いそーだ
あかいぞ	あかいです	あかかろー	あかいらしー	あかいそーだ
あけぞ	あかいです	あかかろー	あかいらしー	あかいそーだ
あけど	あこごわんど	あかかどが	あかかふやっど	あけちど

赤くない

あかくない
あくなか
あけね

4. 高い

あの人は背が高い	高かった	高くてやせていた	高いか
あのひとはせがたかい	たかかった	たかくてやせていた	たかいけ
あんひとはせがたっかど	たかかった	たかくてやせちよった	たかかけ
あんやちゃたけがたけ	たかかった	たこしてやせちよった	たけか

高いぞ	高いです	高かろー	高いらしー	高いそーだ	高くないた
たかいぞ	たかいです	たかかろー	たかいらしー	たかいそーだ	たかくない
たけぞ	たかいです	たかかろー	たかいらしー	たかいそーだ	たかくない
たけど	たこごわす	たかかろ	たけふじゃ	たけつど	たこね

(24)

助詞・助動詞（名詞に接続する助詞・助動詞の例を若干挙げる）

5. 川+～

川に何か浮かんでいる

かわに なんか うかんでる

かわに なんか うかんじょっ

かうえ ないか うこじょっ

川で子どもが泳いでいる

かわで こどもが およいでいる

かわで こどんが およいじょっ

かわで こどんが おえじょっ

あの川は幅が広い

あの かわは はばが ひろい

あん かわは はばが ひれ

あん かわは はばが ひれ

川と海が見える

かわと うみが みえる

かわと うんが みゆっど

かわと うんが みゆっ

川か海かが見える

かわか うみかが みえる

かわか うんかが みゆっど

かわか うんかが みゆっ

あれは川か

あれは かわけ

あいは かわけ

あや かわか

川と思う

かわと おもー

かわと おもー

かわち おも

あれは川だ

あれは かわだ

あいは かわだ

あや かわじゃ

川です

かわです

かわです

かわごわんど

川だろー

かわだろー

かわだろー

かわじゃろ

どーもあれは川らしー

どーも あれは かわらしー

どーも あいは かわらしー

いけんしてん あや かわんごちゃっ

川から岸へ上がる

かわから きしへ あがる

かわから きしへ あがる

かわから きし あがっ

川しか見えない

かわしか みえない

かわしか みえん

かわしか みえん

この川さえ泳ぎ渡れないのか

この かわさえ およぎわたれないのけ
 こん かわさえ およが できんとけ
 こん かわせか おえで わたやならんとか

この川なんかかたんに泳ぎ渡れる

この かわなんか かんたんに およぎわたれる
 こん かわなんか かんたんに およが でくっ
 こん かわなんだ もやす おえで わたいがなっ

この川ぐらい泳ぎ渡れ

この かわぐらい およぎわたれ
 こん かわぐらい およぎわたれ
 こん かわぐれ おえで わたれ

川ばかり見ている

かわばかり みている
 かわばかり みている
 かわばっかい みちよっ

あっちの川はこっちの川より幅が広い

あっちの かわは こっちの かわより はぼが ひろい
 あっちん かわは こっちん かわより はぼが ひれ
 あっちん かわは こっちん かわよっかん はぼが ひれ

この川こそ島で一番大きな川だ

この かわこそ しまで いちばん おおきな かわだ
 こん かわこそ しまで いちばん ふとか かわだ
 こん かわくさ しまで いっばん ふっとか かわじゃ

6. 海+～

海に何か浮かんでいる

うみに なにか うかんでる
 うんに ないか うかんでいる
 うんに ないか うこじよっ

海で魚を取る

うみで さかなを とる
 うんで さかなを とる
 うんで いおを とっ

ここの海はきれいだ

ここの うみは きれいだ
 ここの うんは きれいだ
 ここん うんな みごっか

海と川が見える

うみと かわが みえる
 うんと かわが みえっど
 うんと かわが みゆっ

(26)

海か川かが見える	あそこに見えるのは海か	海と思う
うみか かわかが みえる	あそこに見えるのは うみけ	うみと おも
うんか かわかが みゆっど	あひけ みゆっとは うんけ	うんと おも
うんか かわかが みゆっ	あひけ みゆった うんか	うんち おも

あれは海だ	海です	海だろー
あれは うみだ	うみです	うみだろー
あいは うんだ	うんじゃっど	うんだろー
あや うんじゃ	うんごわんど	うんじゃろ

どーもあれは海らしー	海から浜へ上がる
どーも あれは うみらしー	うみから はまへ あがる
どーも あいは うんらしー	うんから はまへ あがる
いけんしてん あや うんじゃろごちゃっ	うんから はめ あがっ

海しか見えない	海さえ見たことないのか
うみしか みえない	うみさえ みたこと ないのけ
うんしか みえん	うんさえ みたこっが なかとけ
うんしか みえん	うんせか みたこた ねか

海なんか見たことない	海ぐらい見ておけ	海ばかり見ている
うみなんか みたことない	うみぐらい みておけ	うみばかり みている
うんなんか みたこっが なか	うんぐらい みちよけ	うんばかり みている
うんなんだ みたこた ね	うんぐれ みちよけ	うんばっかい みちよっ

海より広いものはない	海こそ一番広いものだ
うみより ひろいものは ない	うみこそ いちばん ひろいものだ
うんより ひれもんは ね	うんこそ いちばん ひれもんだ
うんよっかん ひれむんな ね	うんくさ いっばん ひれもんじゃっ

特色有る語法

① 試験を受ける。——うく^っ（動詞二段活用形の残存） ② 死ぬ。——けしめ^{（接頭辞が付くとともにマ行に活用する形）} ③ うさぎの眼は赤い。——イ）あけ、ロ）あかか^{（形容詞イ語尾系の形とカ語尾形）} ④ この本は古い。——イ）ふり、ロ）ふるか^{（同）}
 ⑤ 静かだった。——イ）じゃ^{った}、ロ）や^{った}（断定の助動詞の旧新形） ⑥ 昨日はすご^く火山灰が降った。——イ）わ^っぜー、ロ）わ^っげー ⑦ あれは海か？それとも川か？——^け

以上の①～⑦について、a使用している／b使用しないが聞いたことは有る／c聞いたことも無い、のいずれに該当するかを選択してもらった。それを百分率にして示したのが次の表である。

		男 性			女 性		
		10代	20代	30代	10代	20代	30代
①	a	4 4	5 2	5 6	4	4	1 6
	b	3 6	4 8	2 4	8 4	8 8	8 4
	c	2 0	0	2 0	1 2	8	0
②	a	8	2 8	6 4	0	0	1 2
	b	1 2	2 8	1 6	2 0	3 6	8 0
	c	8 0	4 4	2 0	8 0	6 4	8
③ イ	a	4 8	6 0	4 0	0	0	0
	b	4 0	4 0	5 2	8 0	8 4	8 4
	c	1 2	0	8	2 0	1 6	1 6
③ ロ	a	8	5 6	3 2	4	1 6	1 6
	b	6 8	4 0	6 0	9 6	8 4	8 4
	c	2 4	4	8	0	0	0
④ イ	a	6 4	8 4	9 2	2 0	1 6	2 0
	b	2 8	1 2	8	8 0	8 4	8 0
	c	8	4	0	0	0	0
④ ロ	a	0	4 8	8	8	2 0	2 4
	b	8 0	4 8	8 4	9 2	8 0	7 6
	c	2 0	4	8	0	0	0
⑤ イ	a	1 2	2 4	2 8	0	0	1 2
	b	7 2	6 4	6 8	8 0	9 6	8 4
	c	1 6	1 2	4	2 0	4	4
⑤ ロ	a	2 4	4 0	8	4	8	1 2
	b	7 6	5 6	8 4	8 4	8 4	8 6
	c	0	4	8	1 2	8	2
⑥	a	6 4	7 6	8 0	4 0	4 8	6 0
	b	3 2	2 4	2 0	5 6	5 2	4 0

(28)

イ	c	4	0	0	4	0	0
⑥ 口	a	6 0	4 0	4	5 2	2 8	8
	b	3 6	4 8	6 0	4 8	6 4	4 8
	c	4	1 2	3 6	0	8	4 4
⑦	a	8 8	8 8	6 8	8 4	9 6	8 0
	b	4	1 2	3 2	1 6	4	2 0
	c	8	0	0	0	0	0

これを見ると、①②③イ④イ⑤イ⑥イについては、いずれの場合もほぼ年代が下がるにつれて使用率・理解率が低くなり、それだけ共通語化が進んでいると云って良さそうに思える。ただし、③④⑤⑥については、いずれも口の形との競合という事実が絡んでおり、単純にそのように云うことは適当でない。それらは、おそらく次のような転換の経路をたどっているであろう。③口④口の形容詞カ語尾形は、イ語尾形から変化して生じた「あけ」「ふり」等の形と比較した場合、老年層においては併用されいずれが優勢とも言い難く用いられているが（大隅以東の地域ではイ語尾系の形が優勢）、中年以下の層では前者の方が方言形として意識される傾向が強く、a・b合わせた率が高く成っているであろう。断定の助動詞については、老年層ではもちろん⑤イの「じゃった」がもっぱら用いられるのであり、⑤口の「やった」は若年になるにしたがって使用・理解が拡大する傾向に在るものであることは従来も説かれているところである。⑥口の「わっげー」は、もともと有った「わっぜー」と東京方言からの影響かと思われる「すっげー」とのコンタミネーションによって生じたのではないかと見られる。若年層においては前者の方が好まれるようである。

⑦については、老年層に見られた「か」の形から脱化してまったく新たに若年層で用いられるに至っているもので、地方共通語化の一例として捉えることができるであろう。これについては、日本方言研究会における木部ほかによる発表を参照のこと。

なお、男性と女性との差については、語彙の場合とほぼ同様に考えることができそうである。

3. 音韻の共通語化

3-1 音韻の共通語化についても、まず老年層と若年層との差異を概観しておく必要が有るかと思うが、紙幅の関係も有るので、それについては従来 of 薩隅方言概説書等を参照して頂きたいと思う。

3-2 以下、特色有る音韻について見て行くこととしたい。

- ① シャツを後ろ前に着る。——うしと（ラ行音はダ行音に変わりやすいがシの後ではタ行音に変わる） ② 鳥が飛んでいる。——とい（リは、また、rが脱落してイに変わりやすい） ③ 首が痛い。——くっ（語中尾のイ列音・ウ列音は、多く入声音に変化する） ④ 犬が居る。——いん（語中尾のイ列音・ウ列音のうちナ・マ行音は撥音に変化する） ⑤ 国語の時間。——こっご（濁音の前に促音が立つ） ⑥ 大根を買う。——でこん（a i 複母音の変化） ⑦ 色が黒い。——くれ（o i 複母音の変化） ⑧ 話が違う。——ちご（複母音・長母音の短呼）

以上の①～⑧について、a使用している／b使用しないが聞いたことは有る／c聞いたことも無い、のいずれに該当するかを選択してもらった。それを百分率にして示したのが次の表である。

		男 性			女 性		
		10代	20代	30代	10代	20代	30代
①	a	16	44	80	4	16	4
	b	68	56	16	80	84	96
	c	16	0	4	16	0	0
②	a	4	32	48	0	4	4
	b	56	60	48	80	92	84
	c	40	8	4	20	4	12
③	a	8	24	64	0	4	4
	b	52	76	36	72	84	80
	c	40	0	0	28	12	16
④	a	16	44	88	0	4	4
	b	48	56	8	80	92	96
	c	36	0	4	20	4	0
⑤	a	4	28	48	0	0	4
	b	56	60	44	84	80	72
	c	40	12	8	16	20	24
⑥	a	20	40	80	0	12	4
	b	56	52	20	92	88	96
	c	24	8	0	8	0	0
⑦	a	52	64	80	4	12	20
	b	48	32	12	84	80	76
	c	0	4	8	12	8	4
⑧	a	32	76	84	0	24	28
	b	68	24	16	96	76	72
	c	0	0	0	4	0	0

(30)

これを見ると、⑤⑥の女性の場合を除いて、ほぼ年代が下がるにしたがって使用・理解率が下がっており、次第に共通語化が進んでいることが裏付けられる。⑤⑥の女性の場合について表のような結果が得られたことの原因は良く分からないが、或るいは年代間であまり差が無いものと捉えておいて良いかとも思う。なお、検討を加えたい。

男性と女性との差については1・2の場合と同様に捉えておいて良いであろう。

3-3 最後に最も変化の遅れる事象と考えられる音調について見ておくこととしよう。鹿児島市方言は周知の通りいわゆる2型音調方言であり、すべての語句を、その末尾から2番目の韻律単位が高い（平山輝男のいわゆるA型）か末尾の韻律単位が高い（同B型）かの二つの調値で発音し分ける。これは、老年層においては外来語についてさえそうであり、かなり強固な性格を持つものとするのが従来の見方であったが、調査の結果意外な事実が判明した。

		男 性			女 性		
		10代	20代	30代	10代	20代	30代
日が	鹿共	7 2 2 8	8 4 1 6	8 8 1 2	8 0 2 0	7 6 2 4	9 2 8
火が	鹿共	6 0 4 0	9 2 8	8 0 2 0	7 6 2 4	9 2 8	8 8 1 2
鼻	鹿共	6 0 4 0	6 2 3 8	8 0 2 0	7 2 2 8	7 6 2 4	6 8 3 2
鼻が	鹿共	7 6 2 4	6 8 3 2	8 8 1 2	7 6 2 4	8 4 1 6	9 2 8
花が	鹿共	6 8 3 2	6 0 4 0	8 0 2 0	6 8 3 2	8 8 1 2	8 4 1 6
橋	鹿共	8 4 1 6	9 2 8	1 0 0 0	6 4 3 6	8 4 1 6	1 0 0 0
箸	鹿共	7 2 2 8	7 6 2 4	7 6 2 4	7 6 2 4	9 2 8	8 4 1 6
箸が	鹿共	4 4 5 6	6 0 4 0	7 2 2 8	5 6 4 4	8 4 1 6	7 2 2 8
飴	鹿共	5 6 4 4	6 0 4 0	7 2 2 8	5 6 4 4	8 4 1 6	7 2 2 8
飴が	鹿共	7 2 2 8	8 4 1 6	9 2 8	7 2 2 8	6 8 3 2	7 6 2 4

雨	鹿 共	7 2 2 8	6 4 3 6	6 8 3 2	7 6 2 4	9 2 8	8 4 1 6
雨が	鹿 共	4 4 5 6	5 2 4 8	7 2 2 8	6 4 3 6	9 2 8	7 2 2 8
川	鹿 共	7 2 2 8	9 2 8	9 2 8	6 0 4 0	7 6 2 4	8 0 2 0
皮が	鹿 共	7 2 2 8	6 8 3 2	7 2 2 8	8 4 1 6	9 2 8	9 6 4
紙	鹿 共	7 6 2 4	1 0 0 0	1 0 0 0	6 4 3 6	8 0 2 0	1 0 0 0
髪が	鹿 共	6 0 4 0	6 0 4 0	8 8 1 2	8 8 1 2	8 4 1 6	9 2 8

上表で、「鹿」と有るのは鹿児島市方言に現われて然るべき調値、「共」と有るのは共通語の調値に等しい調値である（数字は百分率）。語例のうち、日・鼻・橋・飴・川・紙はA型、火・花・箸・雨・皮・髪はB型に発音されるものである。つまりは、各々ミニマルペアを成す語であるわけであるが、それらはそうであるだけに共通語の型の影響を蒙りやすいもののように、見る如くかなりの高率で共通語化が認められる。その傾向性としては、概略、年代が下がるにしたがって共通語化の度合いが高く成ると見て良さそうに思うが、20代についてはゆれが比較的大きく、或るいは保存率が高いかと思うと或るいは10代よりも変化率が高かったりで、全体の傾向性を把え難くしているところが有る。特に、女性の方に関して、その事実は指摘できるようである。20代は、まさに共通語化の頂点に達する時期に在る年代として、方言化の傾向を強めようか共通語化の傾向を強めようかと人により迷うところが有るのかもしれない。そう考えれば、男性と女性との間で、3-2までに見て来たような、後者の方が共通語への傾斜の度合いが高かった事実とも矛盾無く、この事実を解釈することができるように思う。如何であろうか。

4. まとめ

4-1 以上見て来たように、鹿児島市方言は、現在急速に語彙・語法の部面のみならず音韻そして音調の部面においてさえ共通語化しつつある。木部が把えようとしたいわゆる「<からいも普通語>とは、老年層の保持していた薩隅方言の色彩濃い鹿児島市方言の古層から脱して、まさに共通語化の波に呑み込まれようとしている現在の若年層の話者達の鹿児島市方言を、話者達自身が形容したものとして理解することができる。古代隼人の時代

(32)

から既に存していた中央語との差異が今まさに埋められようとしていることを、その末裔達はそれなりの感慨を持って見詰めているということであろう。南九州に根を張り、琉球方言に対してさえ影響を与えて来た鹿児島市方言は、この先、該地域の共通語的地位をなお保つことができるであろうか。将来の同方言の姿を、我が耳で把えてみたいものである。

参考文献

木部暢子1995 「方言から「からいも普通語」へ」 「言語」24の12

別表・話者一覧(各年代とも、その年代の後半5年生年とする)

10代：有馬貴子・石坂優子・伊地知克仁・姥ヶ崎美穂・押領司俊介・大迫尚智・大脇尚子・小田原勝也・川越修一・川原純次・菊池理恵・木藤麻衣・久場公司・小橋口洋・小村佳世・境梓・佐藤広一・沢田雄一・塩満正一郎・白石知子・新福紀子・末永祥子・瀬戸内薫子・仙太和範・園田秀作・田口猛・竹崎朋美・竹山学・立石裕介・谷川佳奈子・田平花織里・得田玉樹・中川路政則・永田めぐみ・西隆行・西田沙織・馬場公平・濱田美穂・濱平賢太郎・平田瑠美・藤崎嵩宏・星原安紀子・松元顕子・水間恵美子・宮内紀一・山城理恵・山田千恵子

20代：荒川和彦・荒川直子・有村仁・岩下洋子・内村賢一・榎並真弓・大久保孔子・神野剛士・川畑洋・川原芳子・草原礼子・郷田由美子・小村真二・崎田佳子・白木ひとみ・仁賀与志満・末山さつき・杉光弘幸・瀬戸口恵・竹内康弘・田島健作・田原真寿美・鎮守俊行・水流直美・床次元美・中島幸太郎・中島正代・中村博・永仮光久・永友智子・西村恵・西本雅代・野間育人・東浩一・南聡子・南祐司・村岡敦・村田明子・安田直高・山内浩二・山之口格・山之口聖子・渡辺勇人・匿名5名

30代：秋山喜治・岩城正・宇都真知子・海老原比呂子・小園秀美・梶原忠・川崎恭資・川崎昌一・加治屋孝一・木下和美・久木田有子・木場信一・下鶴広美・瀬戸口一男・竹下洋一・竹山江利子・谷下綱子・谷山光洋・田村倫代・辻村照隆・辻村伸代・鳥越尚美・中尾

真美・前田真理・西正樹・西木場満理・西中川美和子・西前幹雄・野崎健二・早瀬豊博・東美奈子・日浦敦子・福元聡子・藤原満理・堀田優子・松木田法二・松下耕二・松本貴子・森山和子・山下サヨ子・山元信介・脇野健一・匿名6名

本稿は、鮫島雅美の鹿児島大学教育学部平成6年度卒業研究に示されたところを、崎村弘文が補訂し新たな解釈を加えることによって成ったものである。10代・20代・30代各50名程度の話者による調査で何程の成果を挙げ得るやといぶかしむ向きも有るかと思うが、20代・30代で生え抜きかつ地元をほとんど離れたことの無い話者を探ることがいかに困難であるか、大都市で調査を行なったことの有る方ならすぐに御理解頂けることと思う。特に、今回は、鹿児島市の中でも中心的地域の方言を把えることとし、藩政時代以来異彩有る方言地域とされて来た伊敷・吉野・谷山（谷山は、以前谷山市として独立していたことも有る）の諸地域から話者を選定することをしなかったため、話者選びには一層の困難が伴った。鮫島は、その困難を乗り越えて良く努力したと評価できるように思う。現れた結果も存外に興味深いものであることは、本文を見て納得して頂けるであろう。

さしも強固な勢力を持っていた薩隅方言も、鹿児島市方言を先頭として共通語化の荒波に洗われようとしているようである。崎村は、16年前に鹿児島市にやって来て以来、その変化の様子を見つめて来た。最初の二、三年は生活するのに困難を覚える程であったが、それもいつしか耳慣れ、現在ではその頃幼児であったはずの学生達に老年層の話者達の語りを事細かに解説する側と成った。やがてその話者達が居なくなれば、かつて集団就職等で出た都会での会話に苦痛を覚えるあまり自殺する者まで出した程の言葉の壁が、音を立てて崩れて行くことであろう。方言は、国語史研究の上でも生活に根ざしたものとしても誠に貴重なものであるが、一方では中央語との距離があまりに遠い場合、その話者自身を傷付けるものと成った事も忘れてはなるまい。例えば、琉球地域で悪名高いいわゆる「方言札」の問題も、薩長藩閩の旗頭であったはずの鹿児島においては、自らの生き残りを懸けて子弟を教育するための手段として自らにも課した（現に鹿児島県内の40代以上の話者達は皆その経験を多かれ少なかれ持っている）ものであったことは、あまり知られていないが事実である。福岡県久留米市方言を母語とする崎村もまた、隼人の末裔達と同じような感慨を持って「くからいも普通語」の展開を見守って行きたいと思っている次第である。

——崎村弘文（鹿児島大学教育学部助教授）——

——鮫島雅美（西之表市立榕城小学校教諭）——